

2016年  
大賞作品**羊と鋼の森**

このタイ  
トルはどう  
いう意味か  
と、読む前  
はピンとこ  
なかったのだが…。

1人の少年が高校生の時、学校にやつてきた調律師との出会いをきっかけに、自分も同じく調律師を目指し、様々な思いを抱えながら成長していく過程を描いている。調律師になった青年は考え。理想の音とは?その音がどんな色の音か、演奏者が、聴衆が心地よい音とは?そして、生きていく中の目的を見つけた時の煌き、諦めると決めた時の挫折感など、その様子は淡々と、穏やかだ。

あつという間にページを繰るというよ

りは、読んでいるうちに心に落ち着きを

著者もまた繊細な主人公、そして想

像できる。調律師という職業に熱い志を

持ちながら、その想いを静かに表現して

います。

2017年  
大賞作品**蜜蜂と遠雷**

2005年  
受賞の「夜のビ  
クニック」では  
若者の心情を  
とても瑞々しく  
描かれてい

た。今回はピアノコンクールをテーマにした作品である。緊張感や臨場感、そして嫉妬心やライバル心などが、どう表現されるのかと期待しながらページを繰り、読み進めました。

流石は恩田陸。もしかしてコンクールにエントリー経験があるのかと思うほど表現力。読んでいる自分も観客の一人になつたように、目の前の舞台に演奏者がいるかのように、心の中で「頑張れ。ミスしないで。」と念じる。

頭の中が緊張感でキュッと熱を持つ。小説を読んで音楽に浸れます。読了後。さて、とYouTubeを開き、本の中で聴いた曲を実際に耳で確かめたい。そんな気持ちになる。直木賞とのダブル受賞作品。

2018年  
大賞作品**かがみの孤城**

学校に  
通う世代  
の「生きに  
くさ」のよ  
うな事を  
描いていくのだろうか。

ストーリーへの予備知識は全くゼロで読み始めた。そうすると、序盤で「これはファンタジーなのか」と意表を突かれ。登場人物たちの、特に主人公の心の動きは稚拙な表現だなと感じながら読んだが、これは中学生の少女たちの物語だから?わざとそ

してているのだろうか。ただ、テーマは「不登校」。重たいのだ。中高生が読むと、印象は変わるだろうか。

長編ということもあり、中盤で中だるみを感じながらも、なんとか読了。あまり良いことを言つていいが、最後の謎解きと、「そうだったのか」と思

う部分は、悪くない。だから読み始めて、途中で挫折しそうになつても、最後まで読んで下さい。

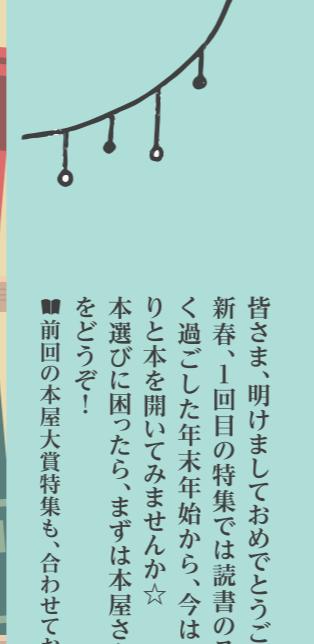
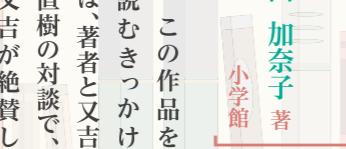
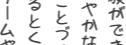
# 本屋大賞 6作品 読んでみました。



第1弾は  
こちらのQRから  
ご覧下さい!

読者プレゼント  
抽選で5名様に  
1,000円分の  
図書カードプレゼント!  
詳しくはプレゼント枠を  
みてね♪

活字離ればれてから、もうかなりの年数が経つ。でも、読んだ内容を頭で空想し心で感じ、疑似体験ができる事は、想像力が豊かになり集中力も高まる。さやかな現実逃避ができる事でストレス解消にもなる! 良いことづくめではないか~の上、読書力の向上、ホーリスマホーリムやしならも良いが、やっぱり読書が一番落ち着かせる一策だと思つた  
だがいががだう。

2019年  
大賞作品**そして、バトンは渡された**瀬尾  
まいこ著  
文藝春秋2015年  
2位作品**サラバ!**西  
加奈子著  
小学館2016年  
8位作品**ひとつむぎの手**知念  
実希人著  
新潮社2016年  
8位作品**Column**

第1弾は  
こちらのQRから  
ご覧下さい!

読者プレゼント  
抽選で5名様に  
1,000円分の  
図書カードプレゼント!  
詳しくはプレゼント枠を  
みてね♪

物語は  
17歳の少  
女の言葉で  
淡々と紡が  
れていく。

多感な時期に4度も姓が変わったが、  
彼女はいつも愛され、幸せだと言う。  
節目のたびに「覚悟」や現実を受け入  
れるを得ない「諦め」があつたはず  
だが、本の中ではさらりとかわす。「そ  
んな簡単ではないはずだと感じなが  
ら読み進め、登場する「親」たちに偽  
善的なものを感じるのは、私がへそ曲  
がりだからだろうか。そして1つの疑  
問を感じながら読み、それが終盤で明  
らかになる。22歳に成長した「娘」は、  
その事実を、いたずらに冷静に受け  
止める。周りの親たちも幸せそう。  
多くの読者は「その程度!」と感じ  
そのままだが…。テーマが重たいのに、  
軽いタッチで描いたという印象。読み  
手によつて評価が分かれそつ。

この作品を  
読むきっかけ  
は著者と又吉  
直樹の対談で、  
又吉が絶賛し

ていた事に始  
まつた。直木賞受賞作でもあり、その魅  
力を確かめたくなつた訳だ。

上巻。主人公の「僕」が幼少期の出来  
事を語り、その幼い日常を読まされてい  
る事に少々退屈を感じる。中巻になると  
青年期。「僕」は何もかもが上手くい  
く。しかし、下巻に入ると雰囲気がガラ  
リと変わる。

優しい父、自己中心的な母、そして奇  
矯な振る舞いを繰り返す姉。ばらばらに  
なる家族。自分は? アイツは「僕」より  
下のはず…それなのに、嫉妬する。自己  
嫌悪に陥る。

でも、そのままで終わらない。何を  
信じるのか。どう生きるのか。少々哲学  
的な印象。人物の心の内を読み取れる言  
葉の表現力が良いなど、そう思いました。

文章で「気に読めます。」